

段差の底釣りの

最近の傾向

段差の底釣り（以下段底）

は、今や魚の活性が落ちてきたときの釣り方として、アングラーの中では認められた釣り方となっている。状況が渋いから、段底」というイメージより、冬〜初春に段底というイメージが釣り人の間で定着しているのも事実だ。

年内までの、ある程度活性がある時期は、比較的段差は狭めで攻める。つまり下バリ

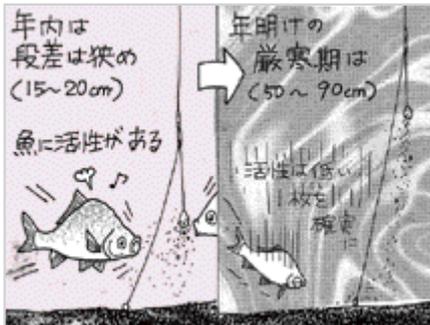
トントンの状態で、段差 15 cm とか 20 cm がメイン。

また、年を越して厳寒期の段底となると、段差は広く 50〜80 cm、90 cm と広がっていく。これは上バリのバラケエサに対して寄ってくる魚の距離と比例するのだ。

活性が高ければバラケエサに対して近づき、そのエサを口にする。つまり両ダンゴなどの共エサで釣れてくるということだ。

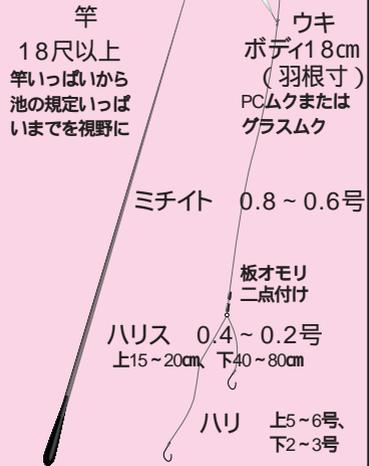
逆に活性が低ければ、バラ

ケエサより遠く離れてバラケた数を口にしていく程度。よって、段差をとって魚まで届かせることが必須となる。寄せて釣る活性時と、一点集中型で釣る渋い時期とに分かれていくため、エサのバラける範囲をいかにコントロールしていくかが、この段差の底釣りでのパターンの違いといえよう。



うより、確実に1枚ずつ釣っていくイメージの釣りだ。

仕掛け図



注意点 まず竿は水深いっぱいの状態で攻めるのが釣りやすい。しかしこの釣り方も、定番化してきているため、へら鮎も慣れてきて難しさも出てきている。よって、近年は池の規定いっぱいの長竿で段底というケースも目に付き出している。ウキはPCMクがグラスムクがベスト。ラインは季節風を考慮して、細目の0.8~0.6号を選択。ハリスも同様に0.4~0.2号ぐらいを長めに用意しておこう。ハリについても、重め的小バリ、細目の小バリとわけて、ハリスとのミックスで用意しておくのがベストだろう。

●釣り方&エサ使いのコツ

エサのブレンドについては2つのパターンを考えていこう。

まずは、流行のペレット系のバラケエサ。このエサは、まず何が優れているかという点、寄せるというパワーと、魚のタナを安定させるという点を兼ね備えているからだ。

あくまでも底釣りのひとつとして考えていくので、底近

くに魚をキープすることが大切だ。

もう一つは、黙系・さなぎ系のパターンだ。さなぎの集魚効果も高い。作り方によっては広範囲にへら鮒を寄せられるし、一点集中もできる広いバリエーションを持っている。特に野釣りなどでは有効と思われる。

魚影の濃さと、その池の魚

オモリ量とエサの大きさ

エサ
実寸大

くわせ わらびウドンなら5~6mm角、グルテンは8~12mm

ウドン



グルテン



バラケ 16mm×20mmを目安に、ウキが潜る場合は小さく、逆の場合は大きくエサ付けする。



オモリ
実寸大

オモリのサイズ
0.25mm厚の板オモリ
17mm×28mmを二点



パターン 1

ペレット系のバラケエサ

**ダンゴの底釣り夏100cc +
ペレ道200cc + 水200cc +
スーパーダンゴまたは
バラケマッハ500cc**

ウワズリ気味のときや、アタリが決まらない場合は、あらかじめ水に浸しておいた「粒戦」を加えてみるのもよい。



+



+



+



or



の活性にあわせて使い分けていくとよいだろう。

具体的にエサ作りの考え方を述べると、マルキユー製品で、魚を寄せるというパワーでは、「ペレ道」が高い。

この「ペレ道」をベースに、狙ったタナ（水深）までエサを持たせるつなぎ役として、「ダングの底釣り夏」や「グルバラ」を使う。そして底にあるくわせエ

サに、バラケががぶつていくイメージで、「バラケマツハ」や「スーパーダング」、「白べら」などで魚を寄せていく。これらのエサは、比較的管理釣り場などで効果が見られることが多く、多用されている。重さとまとまりの良さで魚をコントロールしていくエサだ。

麩系のエサでバラケを作っていく場合は、さなぎ系の集魚効果の高い「新B」、「段差



バラケ、「バラケマツハ」を中心に、よく練り込みネバリを出してエサの芯を作ることがポイントだ。

この練り方が弱かったり弱なかつたりすると、エサのバラケ性が高くなり、一点集中型とはなりにくくなる。しっかりと50回以上エサボウルにこすりつけるか、または握りつぶして練ること。

これを水でもどし、多少や

パターン 2

麩系・さなぎ系のバラケエサ

新B400cc +
バラケマツハ400cc +
水200ccで練り込み
水50で戻して + 軽麩300cc



+



+



よく練り込む



水50ccでもどす

+



くわせエサ

1

特選わらび彩1分包 + 水120cc



+



2

感嘆 20cc + 水30cc



+



3

カ玉



4

わたグル50cc + 水60cc



+



5

グルテン 21 50cc + 水60cc



+



わらかくしていく。耳たぶよりやわらかくなる位まで水を入れて、全体が均一な手触りになるようにする。

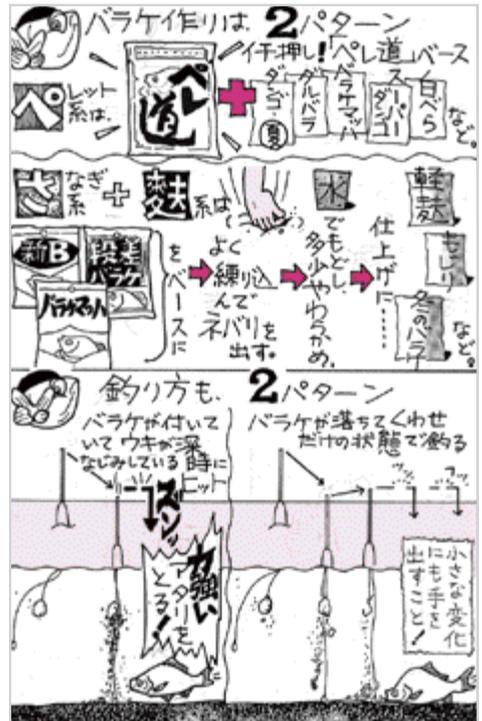
これにバラケ性と集魚効果を少し抑えた麸エサの「軽麸」「もじり」「冬のバラケ」などを混ぜ合わせ、硬めに仕上げると、丁寧にゆっくりかき混ぜ、細かくなるようにほぐすのもポイントといえよ。

手直しは手水と練り方、エサの大小、バラケ性の高い麸

の追い足しなどで、ウキの動く方向へ進んでいく。

攻め方は、大きく分けて2通りある。まずひとつは、バラケがしっかりとついてウキが深なじみしているときにヒットしてくるパターン。これは、宙釣り感覚で攻めているイメージだ。力強いアタリには手を出していない。

ふたつめは、逆にバラケが落ちてくわせエサだけの状態となって釣っていくパターン



ブレンドの考え方

ベース

魚を寄せるというパワーが一番の「ペレ道」をベース。



+ つなぎ役

狙ったタナ(水深)までエサを持たせるつなぎ役として、「ダンゴの底釣り夏」や「グルバラ」など。グルテン繊維を含んでいるので、エサを持たせる役割を担う。



+ パラケ効果

水底にあるくわせエサに、パラケを降らせるイメージで、「パラケマツハ」や「スーパーダンゴ」、「白べら」などで、魚を寄せる。



ペレット系

重さとまとまりの良さ
で魚をコントロールし
ていくエサ。

集魚効果

さなぎ系で集魚効果の高い「新B」、「段差パラケ」、「パラケマツハ」を中心に、よく練り込みネバリを出してエサの芯を作ることがポイント。



+ まとめ役

パラケ性と集魚効果を少し抑えた麸エサの「軽麸」、「もじり」、「冬のバラケ」で、硬めに仕上げる。丁寧にゆっくり、細かくなるようにほぐすこと。



麸系・さなぎ系

広範囲にへら鮒を寄せ
ることも、一点集中も
できるエサ。

で、エサは狙ったタナで一気に抜けてくれるやわらかいエサで攻めるようにしよう。このとき大切なのは、しっかりとじみ幅(4〜5目盛)を入れてからパラケを底に落とすこと。上層からパラケでタナまで持たないということがないように注意しよう。くわせエサだけで待つわけだから、小さな変化にも手を出していく、グルテンの底釣りのイメージで攻めるパターンだ。

段底は、以上のように2つの攻め方ができるので、作ったエサをいかに上バりに付けてどうやって釣るかを、頭の中でイメージしながら釣っていくとよいだろう。

釣り方を頭の中で分け、アタリを頭の中で分けて釣っていくと段差の底釣り。一投で2つの攻め方ができる有効な方法だ。その中のパターンをしっかり見極めて、ヒット率の高い攻め方で確実に釣っていく。

バランスの底釣り こんな時どおする？

Q¹
段底を
しているが
アタリが
少ない

A¹
段底をしていてアタリが出ないということはよくある。これにはふたつの原因が考えられる。ひとつは下バリのくわせエサが付いていないことが多い。ゆっくり竿を上げてみて、くわせエサが付いているかどうか確認しよう。
もうひとつは、下バリスの長さが短いということ。もっと段差をつけないとアタリが出せない、超食い渋りパターンだ。ウキに変化がでてくる長さをこまめに変えて探っていこう。



Q³ アタリは出るけど
ヒットしない...

A³
力強くアタリが出てもヒットしないときは、まず上バリのバラケ性が良すぎて、魚がはしゃぎすぎているケースが考えられる。バラケエサの手直しを考えよう。エサを小さくしっかり付けていく方法。駄エサを追い足して硬くしていく方法。エサを練ってバラケ性を抑える方法。これらのいずれかをまずやってみよう。どれが良いかを判断するためにも、一投、二投ではなく、しばらくは打っていくのがポイントだ。

もうひとつは、底が掘れてしまったり、水位が上がったりしてタナが変化している場合だ。もう一度タナを測り直して下バリのトンを確認しよう。また、下バりを多少ずらしていくのもよいだろう。タナは正確にするのがポイントだ。時間をかけてゆっくりやろう。

Q² くわせエサは
ウドン・「感嘆」系と
グルテン系どっち？

A²
くわせエサについては、まず両方とも用意しておこう。特にわらびウドンは、自宅で作って持参しなくてはならない。その他は現場で用意できるので、「感嘆」「感嘆」「わたぐる」「グルテン 21」「カ玉」などを、バッグに入れておくとよいだろう。

底に凹凸があるところや、ヘドロや藻類があるところなどでは、グルテンがよいだろう。逆に底がきれいで平らな場所では、わらびウドンがよいだろう。

これで必ず！という訳ではなく、上記のようにスタートして、やはり当日の反応やヒット率が良い方へと進んでいくのがベスト。また、野釣りではグルテン、管理池はわらびウドンと分けてスタートしていくのも目安となる。

